法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-26

リチャード・コックス日記(Diary of Richard Cocks)試訳(3)1616年4月から5月まで

森, 睦彦 / MORI, Mutsuhiko / 武田, 万里子 / TAKEDA, Mariko

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政史学 / 法政史学
(巻 / Volume)
23
(開始ページ / Start Page)
63
(終了ページ / End Page)
74
(発行年 / Year)
1971-03-23

Hosei University Repository

リチャード・コックス日記 Dairy of Richard Cocks 試訳(三)

——一六一六年四月から五月まで——

武田万里子
森睦彦

四月一日（元和二年二月二五日新暦）

大坂発先月二二日付のウィッカム(1)君の手紙を受け取った。彼は材木と釘の用意が出来たこと、材木はつぎの日運賃一〇〇匁で肥後の帆船に積み込む予定であることを報じていた。またいくつかの報告もあったが、不確かなことなので記することもないと思う。

また私はジョルジュ・ドゥロイス(2)にもう一通手紙を出して砂糖づけ二、三壺を買わせた。残っていた分はすべて薩摩侯(3)に贈呈してしまい、その後主殿様(4)・三五郎様(5)・総右衛門殿(6)が私の所に、やはり薩摩侯に贈りたいからと求めて来たためである。この手紙は藩主のカフロ(7)、アントニオに託して送った。

四月三日

薩摩侯は今朝平戸の停泊地から出帆した。主膳殿(8)は商館の庭に植えるようにと、見事な花木を一本贈ってくれた。

四月四日

大御所様(9)の銀一七匁を盗んで逃げていた男の妻が、息子や召使い、それに持物全部といっしょに取り押えられ、入牢しなければならないはめになった。そこで彼女の知人たちが私とアンドレア・ディティス(10)の所に来て目付(11)に話してほしいと言ったので、そうしてやった。それで人々は彼女を入牢させるのをやめ、どうしたらよいか評定することになった。

四月七日

主殿様は私の金魚のことを知って所望の使いをよこした。そこで彼に贈ったところ、大きな黒犬をくれた。彼は胡椒を少しと丁子(12)を少々所望したので、これも送った。胡椒が二斤ほどと丁子少々である。

四月一〇日

支那甲必丹が私にサイプレス(13)絹のような白い絹の縮一反をくれた。オスタウィック(14)君はそれと同じ様なものをバンタム(15)で二レアル(16)で買ったといった。

四月一一日

Hosei University Repository

支那甲必丹が五島の近くのお堂[17]へお詣りに出かけた。弟の華宇[18]の健康回復の祈願のためである。

四月一二日

通訳の細君がジョルジュ・ドゥロイスの手紙と獣脂蠟燭三六本を届けて来た。等安[19]が放免しようとしてくれないので、彼女は父親を自由にしてやることができずに戻って来た。

ニールソン[20]君、オスタウィック君と私はこの日大炊殿の所へ正餐に出かけ、歓待された。一同は特に、オランダ人が我々より先に薩摩侯[21]の御前に出るような僭越なまねをしたこと、それについて私がキャプテン・スペックス[22]を難じたことなどを話題にした。しかし一同はこれをどちらかといえばオランダ人に対する非難と受け取った。英国国王[23]がオランダの主要な城に守備兵を配置しているからで、オランダ人はこれを否定することはできない。

今日江戸から二人のスペイン人が来て、大御所様が死去したというわさが中央ではもっぱらで、肥前侯[24]が大部隊をひきいて駿河へ向うのに出合ったと言った。そのため、中央でいくさが始まるのではないかと思ったという。ウィッカム君やイートン[25]君も、何がおこるかわからないので、しのこした仕事をそのままに、平戸へ戻る用意をしているだろうとも言った。支那甲必丹がお詣りから戻った。

四月一三日

スペイン人のパスクァルが平戸のイギリス人のうちのだれがウィッカム君の親類なのかと尋ね、結局オスタウィック君であることがわかった。ウィッカム君はオスタウィック君に上等の白竜涎

香を二斤半、一斤一貫目で売却したという証文を送り、オスタウィック君に支払い金を受け取るように指示したのである。彼はまた当地で会社用に私に二〇〇匁で売るのを拒否し、もう一斤同様の品をバンタムのキャプテン・ジャーデン[26]へ、キャプテン・コピンドール[27]に託して送った。以前にももっと高値に売ろうとして、ひそかに他の人々にも話を持ちかけたが断わられたのである。そのような訳で今や私は、彼が上等の竜涎香四、五斤をくすねて琉球から印度へ渡ろうと計画し、そのために日本船かオランダ船でただちにパタニ[28]かバンタムへ出発しようとしたのだという私の想像は誤っていないと思うのである。しかし私が何でも彼の望み通りに利用させたことを考えれば、私が彼と協調的だったかどうかについては、彼や世間の判断にまつばかりである。しかもその上に私は、彼が利益をあげるようにと一五〇レアルを貸し、私自身も自分の持分から同額を友人として、必要があれば与えようとした。しかし彼は私が渡した金を返し、前述のようにすべて自分の金を使った。

キャプテン・スペックスが来たので、彼が出しゃばって私より先に薩摩侯の御前に出たのにはびっくりしたと一言言ってやった。彼の答は、自分にはそうしてはならない理由がわからない、自分はこの地方ではオランダの[29]君主と国土とを、英国のそれ以上とは思わないにしても同等と思っている、ということだった。

支那甲必丹が大勢の日本人と共に夕食を取るようにとニールソン君、オスタウィック君、それに私を招待してくれた。

四月一四日

Hosei University Repository

私は大坂発三月二四日付のイートン君の手紙が、肥前の船で材木と共に送られて来たのを受け取った。[30]

ブアヌコすなわち板材　一二〇〇枚　一二枚ずつ一〇〇束
　計三〇匁
杉綛すなわち横木五〇〇本　一〇〇本二七匁　計一三五匁
棒すなわち横木　三〇〇本　一本二分五厘　計七五匁
シセロすなわち板材　四〇枚　一枚五匁八分　計二三二匁
タカヌカすなわち円材　一五本　一本六分　計九〇匁
杉板すなわち板材　一〇〇枚　一〇枚一匁三分　計七三匁
　板材、木材　合計六三五匁
　木材運搬船賃　五匁
　計六四〇匁

主殿様から鹿の腰肉二本を贈られた。そのあと売ってほしいと言われたので、私は彼にイギリスのナイフ二丁とオランダのチーズ四分の一を届けた。

四月一五日

上方の坊さんすなわち異教の僧侶が白い花の咲く木を贈ってくれた。

四月一六日

倉庫の軒端をおおうため薩摩の板材を四〇〇枚買わせに長崎に船をやった。

近所の人たちが作ってくれた北側の新らしい塀はがたがただったが、この日またこわれた、と言うよりくずれ落ちた。

四月一七日

大炊殿の息子が、大御所様が平戸侯に帰国を許し、この一〇日のうちにこちらへ到着するだろうと思われる、という知らせをもたらした。

同じころ唐津侯[31]の家来が私を訪ねて来て、大御所[32]様が鷹狩りに行く途中落馬したことから重病になり、だれも話をすることが出来ないらしいというわさがあるのを知らせてくれた。しかしながら将軍[33]様は博多侯[34]と肥前侯には帰国を許し、他の大名すべてには許しが出るまでとどまるように命じたそうだ。

夜になるころ一人の侍が伝言をよこし、大御所様が存命であることは確かで、彼が死去したというわさを封じるために、平戸侯と他の二大名にだけお話しがあったが、健康が決してすぐれてはいないことだけは諸侯にもわかったそうだと伝えてくれた。

四月一八日

瓦六六〇枚、三六〇枚は倉庫の塀用に、三〇〇枚は屋根瓦用に受け取った。

ジョルジュ・ドゥロイスから手紙をもう一通、長崎発新暦四月二四日付で受け取った。彼は薩摩侯が大坂で城塞を建造中で、福島[35]大夫が一しょだというわさがあると書いていた。

また総右衛門殿は、平戸侯[36]の分として持って行った白天竺木綿が売れなかった次第を手紙に書いて来た。それで私にまた引きとってもらいたいというのである。私は、それらの売却については本国の本社にもバンタムの支社にも知らせたので、それは出来かねると返事した。

権之助殿から鹿の腰肉二本を贈られた。助太夫からヨハン[37]貫と

Hosei University Repository

称する円柱三四本を受領した。助右衛門殿が長崎から来て金平糖と軽焼ビスケットをみやげにくれた。

四月一九日

船番衆が二人私の所に来た。そこで特に、キャプテン・スペックスが私より先に薩摩侯の御前に挨拶に出たことと、私がそれを非難したことについて話した。彼らは私の言いぶんがもっともで、今までそのことを知らなかったと言った。

四月二〇日

イートン君が、メキシコから来た船の按針のスペイン(38)人を連れて大坂から到着した。彼はウィッカム君の都発今月四日(39)と六日付の二通の手紙を届けてくれた。ウィッカム君は仕事のことと彼の女を私が(40)粗末に扱ったことについて何やら不機嫌に書いてよこしたが、これは事実ではない。またリチャード・ハドソン(41)から一通、他に二通、キャプテン・アダムズ(42)の息子からの一通と、都(43)と大坂(44)の定宿の主人たちからの一通も受け取った。都の定宿の主人はしろめの鉢二個、大坂の定宿の主人はしろめの椀一〇個を贈り物として送ってくれた。

助太夫殿から次の材木を受け取った。

長さ二間の松貫	七九本
長さ二間の楢貫	二〇本
二間半の円柱（根太木）	四五本

ニールソン君は藩主のカフロのアントニオとかん〳〵になってけんかし、私の目の前で彼をなぐった。

四月二一日

私は銀と金めっきとで二重に作った塩入れの一三レアル八分の一のものを、同量のスペイン貨で買った。

四月二二日

マティンガ(45)の古い金指輪五個を新しくこしらえるため金細工師に渡した。

イートン君は私に日本の杯五個、椀四個、日本の皿八枚、杯洗一個をくれた。

四月二三日

助太夫殿から次の木材を受け取った。

貫すなわち横木	二九七本
八尺すなわち円柱	一七本
一インチの板、すなわち八尺の一寸貫	七〇本
二間の角すなわち角材	三〇本

家屋用の瓦を舟一隻分七〇〇枚受け取った。さらにもう一隻分七〇〇枚、うち家屋用四五〇枚、倉庫用平瓦二五〇枚、を受け取った。

四月二四日

大工の差掛けの小屋を作るため、小さい円柱四〇本を二匁で買った。トメ(46)殿は苫二〇枚を貸してくれた。支那甲必丹も大工の小屋をおおう小さい藤を六束貸してくれた。他に二人の人からゴレサノを通じて苫四〇枚を買った。

四月二五日

左兵衛殿から二〇枚一匁で苫二〇〇枚を借りた。

四月二六日

Hosei University Repository

私は平戸侯肥前様に挨拶状を出し、無事に駿河に到着され、大御所様に歓待されたことを聞いて喜びにたえない、もし当地に英国から船が来たり、シャムからジャンクが来航した場合には、その旨お知らせする、と書いた。この手紙は大炊殿の便に託して送った。

通訳のゴレサノと、彼が私のために支払ってくれた金の計算をした。

マティンガの湯わかしあるいは釜	六匁五分
ドミンゴ[47]の着物の裏打ち用タフタ一反	一二匁六分五厘
マティンガへ酒一樽	一一匁二分
マティンガの帯、前飾り二つ	一〇匁
ジェフリー[48]の着物の詰め綿	一匁五分
門番カルネイロの靴一足	三匁
自分用の釣り糸	一匁
盲法師へ	一匁
古帽子二個の手入れ代	四匁
自分用の日傘一本	二匁
ドミンゴへ刀一本	八匁
計六〇匁八分五厘	

四月二八日

水門用の角材三本、橋に使う厚板一枚、重宝な小さい引き物七本を受け取った。

四月二九日

与助が立て替えてくれた金の計算をした。

自分用の半長靴と靴二足の工賃として靴屋へ	四匁
マティンガへ足袋一足	二匁六分
樽を運んだ者へ	五匁

四月三〇日

ウィッカム君は、平戸侯の家臣に広巾羅紗二五間を渡したという手紙[49]をくれた。また秀頼様がまだ存命であるとか、戦争のあとで人身売買のかどで二〇〇人の日本人が大坂で死刑にされたとか、大御所様の孫の三河守[50]様が一〇〇貫目すなわち銀二五〇〇ポンドで歌舞伎役者を買ったとかいう、あてにならないうわさがあることも書いて来た。

五月二日（元和二年三月二七日新暦　五月一二日）

今日商館の北側の根太を上げた。

ザンザバー[51]つまり安右衛門殿はこの日我々一同を正餐に招いて親切にもてなしてくれた。

五月三日

二隻の舟で四六〇〇枚の瓦を受け取った。うち五〇枚は倉庫の塀用である。

五月四日

石を積んだ舟一隻を引き取った。クシュクロン殿から。

五月五日

長崎の等安[52]殿の息子が、彼らが呼ぶところの高砂、我々のいうフォーモサの島を手に入れるため、一三隻の船に兵を入れて出帆した。彼は五島にとどまって都からの援軍を待っているそうで、彼らは秀頼[53]様を捜しに琉球へ行くものと思われている。

Hosei University Repository

新らしい門番のペドロ[54]と朝鮮人通訳ミゲルがイエズス会士[55]に雇われている日本人の下僕を英国商館で雇おうとはかったので、私はそれをことわった。しかしペドロはその男を一晩商館に泊めたので、ゴレサノが私にそれを知らせたところ、二人とも腹を立ててゴレサノを殺すとおどかした。それで私はペドロを戸外へ追い出した。いつものように酔っぱらったミゲルは腹を立てて、私にはそうする理由はないはずだと言って口論になったので、私は彼も仲間を連れて行くようにと戸外へ追い出した。

五月八日

私はオスタウィック君に丁銀一貫目を渡した。うち五〇〇匁を彼は雪[56]ノ浦へ材木を買い付けに行くイートン君に手渡した。助太夫殿が我々をだましているからである。

材木の明細は次の通り

角すなわち角材	二五〇本
貫すなわち横木	二五〇本
小さい板	八〇〇枚
門柱	四本
円材	一〇〇本

五月一〇日

トメー殿とクシュクロン殿から庭の敷石用に平石を船二分隻手に入れた。

五月一四日

内膳正殿から野猪の肉半頭分を贈られた。

五月一五日

私はイートン君、支那甲必丹、ジョルジュ・ドゥロイスに手紙を出し、イートン君には買っただけの材木を運び、それ以上は買わないように、石灰を三、四〇〇袋運ぶようにと指示した。これらの手紙は台所の下動きスケョに送らせた。

五月一六日

平戸侯の古い借金な全額丁銀三貫五〇〇匁を大炊殿から受け取った。その他にこの前の分が三〇貫未払いである。つまり今支払われた三貫五〇〇匁の上に平戸侯は三〇貫目の借金があるわけである。この三貫五〇〇匁はオスタウィック君が受け取った。[57]

イートン君が肥前の日本人とけんかし、その男はイートン君を殺そうと図って暴行して杖で打ち倒した。自分の方がイートン君より材木を高値で買ったことの恨みからである。しかしイートン君は自己防衛のため相手に相当の傷を与えた。しかし大村[58]の人々はイートン君に味方した。さもないと肥前の連中はイートン君を殺しかねなかったからである。それで彼私が人を迎えに行かすまで大村の人々に守ってもらって警戒しているのである。

支那甲必丹が長崎から戻り、イートン君が肥後の連中にひどい目に合わされた次第を語り、彼が生命を全うして逃れたのは驚くべきことだと言った。そこで彼の言に従って、私はイートン君の許へ手紙を送るために四丁櫓の船を出し、また同時にもう一通雪ノ浦の代官の許へ日本語で、書記、すなわちイートン君に暴行が加えられないように注意されたく、明日彼の主君である大村侯の許へイートン君を自由にして私の許へ返して下さるように手紙を書くつもりであり、ついては我々には大御所様から与えられた特

Hosei University Repository

権があって、平戸侯の家臣ならそれを証明することが出来るから、その件についてニールソン君を彼に同行させて明朝行ってもらうつもりである、と書いた。そして唐津の重兵衛[59]殿に大村侯へ前述の旨の手紙を書いてもらった。

支那必甲丹の弟のキャプテン・華宇が刺繍入りの寝台の垂れ幕を送ってくれた。

五月一七日

藩主への手紙を持たせてニールソン君を大村へやった。彼は丁銀五〇〇匁と小粒一〇〇匁を持って行った。

支那甲必丹は紋章と鬼瓦二枚とに捺すための金箔を貸してくれた。

五月一八日

肥後の連中とイートン君との争いについて大村から一人の男が来て、例の男が死ぬのではないかと思って連中がいきり立っていると語った。

五月一九日

ここから三里の早岐[60]からニールソン君の手紙を受け取った。彼は逆風のためにそこにとどまっていたが、今朝夜明け前にそこを出発した。イートン君の許へ手紙を持せてやった小船が戻り、彼が傷を負わせた相手は生命に別条ないと伝えた。しかし大村の人々は誰も彼に話をするのを許さず、私の手紙を運んだ男に対しても、贈り物を持って彼の所へ長崎から来たスペイン人に対しても同様であったという。これは老藩主[61]の気難かしい性格によるものと思われる。イートン君はキリスト教徒だが、老藩主はイエズス会士への憎しみのためにその不倶戴天の敵となっていたからである。

我々が寝たあとで、藩主の弟の主殿様が使者をよこし、肥後藩[62]主の許へ早便を出すつもりだが、私が手紙を書くなら届けさせようと伝えて来た。私はこれに対して、大村で何が起ったか、事の真相がイートン君と彼の所へ行ったニールソン君が帰って来て判明するまでは、肥後にどう手紙を書いたらよいかわからない、と返事した。

五月二〇日

私は総右衛門殿の所へ行き、大村の人々が書記、つまりウィリアム・イートン君と話すことを誰にも許さず、金を出しても食料を与えないなど、きびしい取り扱いをしているのには驚いたと述べた。彼はそれに答えて、大村の人々は彼によかれと思ってそのようにして見張りをつけているので、それは一五〇人を越す肥後の人間がイートン君を殺すといきまいているせいであり、また雪ノ浦は小さな町、というか村なので、最悪の事態になるのを恐れてそのように見張りをつけているのである、とはいえイートン君に食料を満足に与えないというのはおかしいことだが、それは悪意からではなくその土地に食物が乏しいからで、もし番衆がニールソン君と一緒に到着したら、イートン君はただちに自由なるだろう、それについては安心していてもいいだろう、そしてその間はがまんしていてもらいたい、自分たちの手数はあなた方英国人たちよりずっと多いのだから、と言った。また総右衛門殿は、もし私がイートン君かニールソン君に手紙を書くなら、今日大村へ

Hosei University Repository

早便で人をやって届けさせようと言ってくれた。私はそこで両人に手紙を書き、平戸から藩主の弟がわざわざつかわしてくれた男に託して送った。

今日我々の平戸の商館の南側を起工した。

五月二一日

私はジョルジュ・ドゥロイスに手紙を書いた。そしてもう一通、大村領雪ノ浦でのイートン君の難儀を彼に知らせるため、スケヨに託して送ろうと思っていたところが、逆風のため今まで手許においてあった手紙を同封して、豊後様の下僕に託して送った。

そののち二隻の船で瓦一四〇〇枚を受け取った。また石を積んだ船三隻を迎えた。一隻はトメー殿、一隻はクシュクロン殿、一隻は新右衛門殿からである。支那甲必丹から藤三五束を手に入れた。

夕方、大村湾発今月二〇日付のニールソン君の手紙が、一緒に行った番衆の手でもたらされた。番衆は今日戻ったところで、大村の人々は挨拶の文句をたくさん彼に言付けて来たが、肥後の殿様に事の次第を報告するまではイートン君を自由にはしないと決めたそうだ。

ニールソン君は、大村の人々がイートン君に不自由させていると知って、雪ノ浦の彼のところへ当面必要なものを届けに出かけた。

召使頭の与助が病気になり、家へ帰って治療を受ける許可を願い出た。

五月二三日

通訳ミゲルが大変体の具合が悪いので療養したいと願い出た。

五月二四日

我々の得た急報によると、オジアンダー号とオランダ船がマカオのポルトガル大船に出合い、琉球沖で戦いになり、船から逃げ出して上陸した数人が薩摩経由で長崎に戻ってこの知らせをもたらしたが、船が無事逃れたどうか、戦闘の結果は知らないという。この次第をジョルジュ・ドゥロイスに手紙に書き、スケヨかそのカフロに託して知らせた。だが、私は例のごとき日本にありがちな虚報ではないかと思う。英国のことわざに従えば、うますぎる話でうたがわしいと思うのだが、一方他のことわざに従って、町にはより悪い知らせが決して来ないように希望したい。

通訳ミゲルの細君が来て漬物の小壺一つをみやげにくれ、この忙しい時に亭主が療治のため休んでしまってすまないと述べた。

私が就寝したあとで総右衛門殿のところから使者が来て、雪ノ浦から入った知らせについて通訳を一人よこしてほしいと言った。そこで私が自分で彼のところに行ったところ、彼が言うには、肥後藩主は大村に手紙をやり、たとえ英国人が肥後の人間を殺害したとしても、報復の意志はない、ただ英国人と一緒にいた平戸の人間のうち何人かが、この争いが大きくなるのにまぎれて何かを盗んだと聞いている、と知らせたそうだ。これが彼が私を呼んだ用件であり、明日この件に関して雪ノ浦へ急いで人をやろうとしている由であった。そこで私はニールソン君への手紙をと

Hosei University Repository

どけてもらえまいかと頼んだ。

五月二五日

ニールソン君は雪ノ浦から帰って来た。しかしイートン君は肥後から番衆が戻るまであとに残ることになった。

先夜イートン君[63]が傷つけた男が死亡した。それで彼らはイートン君のボーイのコー・ジョンを呼び出して、その首を切り落した。騒ぎのもとは彼にあったからである。そして同様のことをスキートにもしようとした。彼らがイートン君に暴行した時にイートン君の味方をしたからである。彼の通訳トメーにも同様にしようとした。すべては一ファージング[64]の値打ちもないわらいも一本のようなことから起ったことである。

ニールソン君を通じて、イートン君からの今月二三、二四日付の手紙を三通と伝票を一通受け取った。伝票は彼の買い付けた木材、板、石灰についてである。

一〇〇本一三〇匁の角材二五〇本	三二五匁
一匁三本の丸木一〇〇本	三三匁
一匁五本の貫二五〇本	五〇匁
門柱四本	四三匁
雪ノ浦で番衆に支払った右の勘定	四五一匁
石灰四〇〇袋、三分五厘づつ	一四〇匁
一匁七本の板八〇〇板	一一四匁
計	七〇五匁

彼はまたジョルジュ・ドゥロイスから長崎で獣脂蝋燭一〇〇本を受け取ったと書いて来た。うち二三本はイートン君が牢中で使用し、五本はニールソン君が道中で使用したそうだ。それでニールソン君は平戸へ七二本持って来た。

五月二九日

ニールソン君、オスタウィック君と、もし肥後から番衆が戻って約束通りイートン君が自由にされたら、イートン君を運ぶ船を用意して、ニールソン君を彼のもとへ行かせるのが最上の策かどうか相談した。そのように結論が出たが、ゴレサノを商館で使う重要な用件があるので、キャプテン・スペックスにオランダ人が使っている通訳を一人借りたい旨許可を求めたところ、聞き入れてくれた。しかし一行の出発用意が出来た時に、一人の日本人が来てオランダ通訳の耳に何かささやいた。すると急に彼は我々のしようとする事柄にかかわり合いたくないと言い出した。それで私はやむなく再びゴレサノを、ニールソン君と、藩主の弟主殿様が私の要請によって随行させてくれる藩主の侍の一人に付添って行かせねばならなくなった。ニールソン君の処置に関する要点は今日付の覚書に見える通りで、写しは私が保管している。ニールソン君に託してイートン君に手紙を書いた。

長崎発七月五日付のジョルジュ・ドゥロイスからの手紙を受けった。それによると、英国船とマカオ船が出合ったというのは偽報で、大船が二頭の馬とその飼料、及び世話する人間四、五人を乗せた小船を引いていただけのことだったそうだが、荒天のため大船から切り離されて薩摩の海岸に漂着し、途中船が沈むなど様々の危険にあって、四人が材木につかまって五日間食物も飲料もなしに生き残ったそうだ。つまり、最初は八人材木につかまって

Hosei University Repository

いたが、琉球に上陸する以前に四人死んだのである。

五月三〇日

唐津の重兵衛殿は新しい大麦五俵、一俵小升五一杯入りのものを、麦芽にするために我々が別のを手に入れられるまで貸してくれた。

五月三一日

いたんだするめ一〇束を出入りの魚屋に七八匁で売った。これで魚を獲り、商館へ入れて支払いにかえるのである。このするめは我々のジャンクのシャムへの初旅のために購入したのだが、船旅が失敗したため、帰るべき所へ帰ることになったわけである。

注

(1) Wickham, Richard 英商館員、近畿地方で勤務。
(2) Durois, Jorge 長崎在住の商人。
(3) 島津家久（天正四―寛永一五）第二回注七二参照。
(4) 松浦半左衛門（源四郎）信辰、主殿。久信の三男、寛永一五没、四二才。
(5) 松浦三五郎信正、松浦鎮信の子。第二回注一九参照。
(6) 南総右衛門、側用人か、松浦鎮信の女を妻とし、同じく宋子三四郎を養子としている。
(7) cafro ポルトガル語のニグロの意味から、さらに転じて奴隷をも意味する。
(8) 主膳については第二回注六四・一〇一参照。
(9) 徳川家康（天文一一―元和二年四月一七日）、慶長一〇年四月に秀忠に譲位し大御所と称した。
(10) Andrea Dittis シナ人商人（泉州出身で甲必丹）。
(11) justice 目付と仮称。
(12) 桃金嬢科の常緑樹、モルッカ島原産、蕾を乾して薬用とし、果実から油も採取する。
(13) 緯糸にやや強い撚糸を用いて織り、後に練ってしわをよせて縮ませた。
(14) Osterwick, John 英商館員。
(15) Bantam インドネシア、ジャワ島西部の都市、また国名。
(16) スペイン語国の貨幣単位。銀貨 rial of eight は約四シリング六ペンス。4 rials＝1 peso＝8 奴
(17) 福江島（福江市）西北部の大円川川口近くの媽祖廟。王直も信仰したと伝承する。
(18) 朱印船貿易家、一六二〇年平戸で没す。
(19) 村山等安、長崎代官、元和五年一族とともに処刑される。
(20) Nealson, William 英商館員。
(21) 一六一六年三月二九日の記事参照。
(22) Specx, Jacques 初代オランダ商館長。
(23) 英国はオランダの要請で一五八五年からレスター伯を司令官とする救援軍を派遣、主要な砦の占有と行政院にも代表者を入れている。
(24) 鍋島直茂（天文七―元和四）、肥前藩主。
(25) Eaton, William 英商館員、江戸・大坂で勤務。
(26) Jourden, John バンタムの英商館長。第一回注一一三参照。

Hosei University Repository

(27) Copindall, Ralph 英船 Osiander 号（前年九月四日来日、今年二月二七日離日）の指揮官。
(28) Pattania 現タイ国南西部、マライ半島東岸、当時女王国で、英・蘭両国の商館あり。
(29) Grave Moristz オランダ統領と陸海軍司令官（一五六七―一六二五、在位一五八七―一六二五）。
(30) ブアヌコ　未詳。
シセロ　ししろか。
タカヌカ　未詳。
(31) 寺沢志摩守広高または正成（永禄六―寛永一〇）。
(32) 徳川家康が元和二年正月二一日駿州田中で放鷹し、その夜鯛の汕掲げを過食して俄に発病したことの誤報。
(33) 徳川秀忠（天正七―寛永九）慶長一〇年将軍宣下。
(34) 黒田長政（永禄一一―元和九）関ヶ原役後筑前一国を受領。
(35) 福島正則（永禄四―寛永一）広島藩主。
(36) 松浦肥前守隆信（天正一九―寛永一四）。久信の長子（母大村純忠の女）、宗陽公。
(37) ヨヘン貫　貫の一種か、未詳。
(38) 「慶元イギリス書翰」岩生成一訳　異国叢書　駿南社　昭和四年刊（雄松堂昭和四一年複刊）、以下「慶元」と略称。一〇三（五七二頁）の、京都のウィッカムから平戸のコックス宛の書翰に「予は浦川に碇泊中のイスパニアの大船のイスパニア人水先案内に、八百匁許の商品を売りたるが」、同一一〇（五九五頁）「イスパニア水先案内ロレンソ・ヴアスケ Lorenço Vasque」の記事あり、同一人物であろう。
　同船は徳川家康がメキシコ貿易を希望した国書を発したのに対する返書持参の使節のもので、一六一五年八月一五日（元和元年閏六月二一日）に浦賀に到着、翌年九月末に出港。
(39) 「慶元」一〇二（四月五日付）、一〇三（同七日付）のことか。同一〇五（五七七頁）に「本月五日及七日附の予の前翰を貴下は既に受取りたりと信ず」とあるので誤記か。（一〇五 India Office, Miscellaneous Records, T.C., no. 43）
(40) おまん、「慶元」一〇二（五六六頁）「予が貴下の婦人及び彼女の夫の保護に託したる可憐なる孤児に対し、貴下が頗る猛烈なる不快の感を起せしには少なからず吃驚せり」のこと、更に「慶元」九六（五〇七頁）、「日記」今年三月一〇―一二日に関連記事あり。
(41) Hudson, Richard 平戸英商館の雇人か。
(42) Joseph 三浦安針には一男一女あり、父の没後に朱印状の交付を受け、貿易に従事した。
(43) 都の定宿、伊丹屋助五郎。
(44) 大坂の定宿、平野屋一郎別名九右衛門、またはあまのや九郎右衛門。大阪市東区平野町に居住。「慶元」一一〇（五九六頁）参照。

「リチャード・コックス日記」試訳（三）（武田・森）

Hosei University Repository

(45) Matinga コックスの日本人妻か。
(46) キリシタンの一瀬とめいか。松田毅一「近世初期日本関係南蛮史料の研究」風間書房　昭和四二刊、一〇九〇頁『イエズス会士コーロス徴収文書』第三文書に署名あり。
(47) Domingo 商館の使用人。
(48) Jeffrey 前注に同じ。
(49)「慶元」一〇五（五七七―五八〇頁）京都発四月一三日付。
(50) 松平忠直（文禄四―慶安三）結城秀康の長子、越前で六七万石を領したが、大坂の陣後に加増なく、不満のため乱行を重ね、元和九年豊後荻原に配流、剃髪して一伯と称した。
(51) 第二回注一八参照。
(52) 村山等安の台湾征伐。元和元年九月九日に朱印状受領。「日記」前年一〇月三〇日にも記事あり。
(53) 豊臣秀頼。元和元年五月八日大坂城で死亡。薩摩亡命の噂が当時もっぱらであった。
(54)「日記」三月二九日に雇入れの記事あり。
(55) イエズス会はイスパニア人貴族イグナチウス・デ・ロヨラ等七人で結団した修道会。一五四〇年九月法皇パウロ三世が公認、東洋伝道に力を注ぎ、ザビエルもその一人で、一五四九年に来日、日本伝道の端緒であたった。
(56) 長崎県西彼杵郡大瀬戸町。
(57)「大日本史料」一二編二六にイートンのニールソン宛書翰（五月二二日付）に詳細な記事あり（東邦に在る使傭人より東印度商会に贈りし書翰　三六二号。Calendar of State Papers No. 1116)。
　また、イートン発、ウィッカム宛の書翰もある（Calendar of State papers No. 1126. Eaton's letter to Wickham at Miako, June 22, 1616, Hirado.)。
(58) 大村藩、肥前国彼杵郡二万八千石。藩主大村純頼（文禄元―元和五）、松浦隆信の室の兄。
(59) 寺沢家中分限並古文書之写（「松浦叢書」巻一　昭和九年刊所収）に、今井重兵衛（三百石天草にて討死）、また町奉行今井十右衛門宛藩主よりの文書がある。
(60) 佐世保市早岐町、平戸藩領。
(61) 大村嘉前、新八郎丹後守（永禄一二―元和二）、元和元年五月に隠居、父純忠は切支丹大名として著名。
(62) 加藤忠広（慶長三―承応二）。
(63) 注五〇イートン書翰に詳細。
(64) 英国の最低貨幣、四分の一ペニイ。

付記

本稿作成は前回に引き続き岩生成一教授のご指導のもとに行なった。原本は村上本である。
　また本稿も、郷土史関係は楢崎豊市猶興館高校教諭、語学面では藤島昌平工学院大学教授のご教示をいただいた。
　なお、前稿及び本稿は「近世初期の日欧交渉史の研究―特に平戸を中心として」の研究課題で、岩生教授・森が、昭和四四年度法政大学特別研究助成金を受けて行なっている研究の一環である。